

## ■空白の10年を乗り越えて 仏教界の怒りを越えて —「もんじゅ」への期待

日本仏教徒懇話会 関根瑛應

### サイクル路線確立は必然の選択肢

平成16年から17年にかけて、核燃料サイクル路線の堅持と高速増殖炉(FBR)開発への前進が改めて打ち出され、日本の原子力利用の基本的姿勢が再確認されることになった。すなわち、原子力委員会は平成16年11月、「新長計策定会議」の中間報告で核燃料サイクルの堅持を決定しており、一方、「もんじゅ」の改造工事については17年2月、地元福井県および敦賀市の事前了解が得られている。かつて動力炉・核燃料開発事業団(動燃)の広報を担当した一員として、私はそれが資源小国のとるべき当然の方途であると得心している。

使用済燃料のワンスルー方式は、サイクル方式に比べて経済的であり、核拡散防止の上からも有利であるとの主張もあったが、巨大な使用済燃料を丸ごと地中に埋めるというのは、広大な適地を必要とする上に、残存ウランやプルトニウムなどの再生可能なエネルギー資源を放棄することであり、環境安全面からも問題がないとは言えない。もちろん、使用済燃料の再処理という技術は厄介な問題を伴うもので安易に考えることは許されないが、わが国には昭和30年代以来、原子燃料公社から動燃へと展開し蓄積された高度な実用技術がある。この技術力がなければ再処理・核燃料サイクルへの道は開かれ

ない。この技術がある以上、再処理そしてウラン資源の有効利用は、必然の選択肢となる。

仏教的発想から言えば、天与のエネルギー資源を無駄にすることはできない。人智を尽くしてその恩恵を享受し、しかもそれが心の安らぎにつながるものでなければならない。放射線防護をはじめとするあらゆる安全対策の確保の上に、安心して再処理の仕事が続けられることを念願する次第である。

### 仏教界の怒りとその真意

「もんじゅ」ナトリウム漏れのあった平成7年の12月8日は、奇しくも釈尊成道の日であった。翌8年に入って、仏教界の指導的立場にある人々を含め「もんじゅ」の事故を糾明し、名称の取り消しを迫る署名運動が広がったとき、私は「もんじゅ」命名の趣旨に理解を求め一文を新聞に投稿し、国のエネルギーにかかわる最先端技術を仏の智慧と慈悲で制御するという悲願のアピールを行った。

仏教界には本来的に物質文明に対する否定的姿勢があり、原子力利用などは不要にして危険性の高い唯物的方策であるという感覚が存在していた。「少欲知足」を旨とし、戒定慧を悟りへの基本とする仏教的価値観からすれば欲望の赴くままにエネルギー供給を増大させることそれ自体

が正しい生き方ではないということであり、まして放射能の危険を伴う原子力発電などは真っ平ご免という考えが、一部に強く存在していた。そこに技術的経験の乏しい新型のFBRなるものが、わが国の将来のエネルギーを担う主役として登場し、いやしくも釈迦如来の脇士である文殊菩薩の名を僭称するとは何ごとであるか、しかもその原子炉が事故を起こすとは。かくて「もんじゅ」の名称を取り消すべしという運動に発展したわけである。寺に生まれ育ち、高僧の警咳に接することの多かった私には、この運動の趣旨は理解できるとしても、これが仏教界の総意であるとは思えなかった。また、この運動を起こした人々も、必ずしも国のエネルギー政策に反対しているわけではなく、文殊の名称と原子炉の事故という不調和に対する怒りを率直に表明したものであると私は理解した。私は「文殊の名を僭称するのではなく、文殊の心を体して事に当たりたいとの悲願である」ことを強調した。

### 安居で原子力の話

昭和44年7月、私は発足早々の動燃の広報室で、PRの仕事に追われていたとき、たまたま、東本願寺の「安居」の席に招かれて、ナショナル・プロジェクトとしての動力炉開発についての話をすることになった。

安居というのは、僧が一定期間1カ所に籠って修行することで、諸宗派で行われていることであるが、宗門の最重要講座の安居でなぜ原子力の話か。それは当時、本山の最高顧問であった宮本正尊博士からの要請で、仏教者も最新の科学技術についての智見を持つ必要があるとの趣旨によるものであった。私は8年余にわたって広報室長を務めたが、この安居での2日にわたる講演は異例なものであった。初日の7月21日は偶然にも米国の宇宙船アポロ11号が人類最初の月面着陸を果たした報道に国中がわいていて、科学技術の威力がひしひしと感ぜられる情勢にあった。選ばれた僧侶たちに、私の話がどのように受けとられたかは分からないが、仏教と原子力とのかかわりの厳粛な一駒であったことは間違いない。

宮本博士には、その後、新型動力炉の命名に関して種々ご高見を賜ったが、博士から、文殊、普賢と並んで「法蔵」の名が持ち出されたことがあった。法蔵菩薩とは、阿弥陀仏が過去世に世自在王仏に侍して修行していたときの名である。この提案はしかし、サイトの地名を重んずる「常陽」へと移行した。仏教界の碩学宮本博士の原子力に寄せられた思いやりを有難く思い起こしている。

### 慈悲の象徴「ふげん」のこと

動燃の初代理事長・井上五郎氏は、昭和47年9月、退任に際してその

心境を詩に託し、自らの生涯を省みつつ、「もんじゅ」、「ふげん」を鴻(おとり)と鶴(くぐい)という大きな鳥になぞらえて期待を表明した。「少年技ニ志シテ鑽研ヲ積ム 一路去来スルコト五十年ナリ 憂フル勿レ燕雀終ニ為ス無シト 鴻鶴ハ将ニ蒼天ニ双ビ飛バントス」

「もんじゅ」の新しい出発に際し、双び飛ばんと詠われた「ふげん」について触れておかねばならない。

昭和53年3月に初臨界、約20年間にわたって発電実績を積んだ新型転換炉「ふげん」に、平成16年4月、アメリカの原子力学会からランドマーク賞が贈られた。この賞は、「ふげん」の貴重な運転経験とその独創性に対する高い評価を示すものである。仏の限りない慈悲を象徴する普賢炉は、その使命を終え、デコミッション技術の実証を進めつつこれまでの開発成果を「もんじゅ」はじめ、次に来る幾多の発電炉への贈りものとして生かしていくことになる。

この春3月18日に催された「ふげん会」で、サイクル機構とメーカー各社の関係者数十名が参集、懇談した折に、代表幹事の明比道夫元理事がその挨拶の最後に述べた、「われわれの仕事を顧みて、これからの『もんじゅ』の人たちの大変な苦勞が思いやられるが、ともに励まし合って進んでいきたい」の一言は、彼の温顔とともに、慈悲の言葉として心を打つものがあった。「ふげん」は平成10年3月までに世界最多のウラン・酸化物混合(MOX)燃料を照射し、180億

kWhの発電を達成している。

### おわりに

私は昭和31年3月、36歳にして原子力平和利用の世界に、まったくの素人として参入した。日本原子力産業会議で設立の事務を担当し、32年5月の日米合同会議の事務方を務め、原子力発電会社の設立業務を手伝った。

浄土真宗の寺の末弟として育ち、東大の哲学科を卒業し、海軍の搭乗員士官で死に損なった自分が、何で原子力なのか。それは人間の因縁としか言いようがないが、私なりに1つの理屈があった。唯一の核被爆国日本は、その償いを報復や逃避に求めるのではなく、この巨大なエネルギーを積極的に平和利用することの中にこそ求めるべきで、それが日本に与えられた世界的使命なのだ。この資源論とも経済論とも異った観念の理念に唆されて、私は原子力とともに生きる運命を負ったのである。

いま私は老残の身に仏教の真の心を模索しながら「もんじゅ」が美事に本来の姿を顕わにして、多くの人びとに「限りない力」を与えてくれることを心から念願している。



【せきね・えいおう 代表世話人】